
嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

森本エリ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

【Nコード】

N6836B

【作者名】

森本エリ

【あらすじ】

虎吉は、ヒモのような生活を送っている二十三歳。世話をしてくれる女に不条理な怒りを抱きながら、日々を過ごしていた。突然、元上司の銀獅ぎんじに“ストリップ見物”に行かないかと誘われた。興味本位で向かった場所では、女達が総てを見せつける。虎吉は、踊り子のヒミコに惹かれるが……。若干、卑猥な表現と暴力的表現を含みます。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

何気ない苛立ちと煙草と俺。(前書き)

ろくでなしの男が苦手な方は閲覧をご遠慮ください。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

何気ない苛立ちと煙草と俺。

よく晴れた昼下がりで。午後十四時。

風が強すぎる。モルタル吹付けの壁、ゴム張りの地面。錆び付いた鉄製の階段。天井は突き抜ける快晴の青空。風が冷たくて強過ぎるのが難点なくらいで、贅沢な喫煙時間だと思う。

喫煙時間を楽しんでいる男の出で立ちは、灰色っぽい緑が混じったぼさぼさ頭、モダンな配色、白っぽい銀地の化繊に赤黒の幾何学模様の柄シャツの前を全開にして、擦り切れたジーンズ。踵が破れて、赤い靴下が見える黒いオールスターハイカットをスリッパの様に履いて、なんとなく薄汚れている。

安物のライターも、吸ってる煙草のジャケットも緑。

目つきの悪い野良猫みたいに気ままで、退屈そうな様子で、屋上の鉄製階段の二段目に座ってぼんやりしていた。

日陰にはいると、とことん冷やされてしまうので、仕方なくそこにいた。

青空は好きだったが、直射日光は頂けない。

男は軽度の日光アレルギーだった。

生まれつきというのものもあるだろうが、日頃の不摂生が祟っているの否めない。太陽光線にさらされていると、ジンマシンができるのだ。

煙草を二本灰にして、男は腰を上げた。

すでに頭の天辺がひりひりして、太陽側にあった左腕が痒い。階段を下りながら、日陰にて冷やされていく肌が心地よかった。

男は、イヤホンを耳にねじ込んだ。“コルツ”の“マンマ・ミーア”が聞こえる。

この曲に合わせて踊れる女の子がいたらいいのに。と切実に思っ

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

だが、自分の側にいるのは、愛に狂った年増の女だった。女は三十歳で、男とは七歳離れている。さほど大きくない企業の事務員をしていて、目鼻立ちのしっかりした髪の長くて多い、肉付きのいい女だ。名前は実世子という。

男は最近仕事を辞め、ここ半月ほど、実世子に世話になっている。彼女は、喜んで男を受け入れたし、かいがいしく飯を用意し、言ってもないのに職場の付き合いをやめて直帰するようになり、男への寝具での奉仕も欠かさない。休日は男と一日中裸でいるのを楽しんでいるか、買い物に連れだし、頼みもしないのに服だ靴だと購入してくれる。

そして、周期的に、夢を見ているような眼差しをしながら、うわ言のように言うのだ。

あなたといると、幸せ。あなたを愛してるのが、私の幸せなのよ、と。

男は最初、それを何ごともなく、ただの言葉として受け止めていた。

男にとって、あらゆる言葉もただの言葉であり、用件を伝える手段で、深淵に横たわる“大きな力”など、信じていなかった。

ただ『愛してる』と言われれば、鸚鵡おしむか九官鳥きゅうかんちょうの如く、そのまま同じ言葉を吐いた。

最初は、なんとなく『愛してる』と思い込んでいたが、繰り返すほど、その言葉が、どのような意味を持っていたのかわからなくなり、飽きもせず繰り返す実世子に殺意さえ感じ始めていた。

男は、めんどくさい事が嫌いで、飽きやすかったのだ。

彼女が作る手の込んだ料理も、押しつけてくるイタリアンメイドの服も、連れて行かれるセレクトシヨップも、寝具での奉仕にさえもうんざりしていた。

『愛してるわ。あなたのこと。私には、あなただけなの』
そう言われれば言われるほど、背筋が凍る気がした。

肉付きがいいと言えば、聞こえがいいかもしれない。

しかし、男はいつも思っていた。

ただ、くずれはじめているだけ。

肉が、皮が、あちこち緩んで弛んでいる。

両足にある、破つてしまいたいほど、苛つかせるぬかるみも同じだった。

男はいつも“今度、『愛してる』と言われたら、『死ぬ』と言わべきか、『うざい』と言うべきか、『失せろ』と言うべきか”考えている。

いずれにしろ、実世子はこの世の不幸の総てを受け止めたように、発狂するのではないか。

狂っているのは、今もだが廃人になりかねない。男は、歪んだ笑みを口許に浮かべた。

あの女ほど鬱陶しい奴はいない。いつそのこと、廃人にでもなつて、どこかに隔離されたらいい。

そう思ったが、やめた。直射日光を遮る2LDKの小綺麗な部屋や、玄関に並べられた靴、クローゼットの服の数々を思うと、胸に渦巻く苛立ちや殺意を、煙草の煙と共に飲み込むしかなかった。

鬱陶しい。男は吐き捨てた。

鼓膜から脳裏に蘇る実世子の声。

いつだって、あの女は、自分に愛していると云う。その言葉が唯一無二の真理であるかのように

煮えくり返るような苛立ちの後に訪れる殺伐とした脱力。風のないう室内にこもった煙が、思考まで白っぽく覆った。

虚無に囚われた男を無機質な電子音が、時の流れに引き戻す。

一瞬警戒し、表情を強張らせたが、ディスプレイには“銀獅^{ぎんじ}さん”の表示。男は、安堵して息を吐いた。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

すぐに携帯電話を手に取り、通話ボタンを押した。どこかすがりつくような気持ちだった。

「……もしもし？」

『おう！虎吉とらきちなんばしよつと？』

「何もしてないですね」 男は少し笑みを漏らした。

銀獅は前働いていた古着屋の店長で、四歳年上だが仕事を離れれば、年齢も立場も隔てなく接してくれる、有り難い存在だった。

適当なくらい細かい事を一々気にしないのが、長所にも短所にもなり得る反面、面倒見がよく、情にあついところもある。

そんな妙なバランスを、虎吉は好ましく感じていた。

銀獅は、虎吉の好みそうなジーンズや柄シャツが入荷したり、面白そうなイベントがあれば、いつだって連絡をくれる。

そのタイミングと来たら見計らったかのように絶妙で、虎吉が暇を持って余して仕方ない時や、燻って爆発直前、という時なのだ。

「どうしたんですか？ 銀獅さん。イベントつすか？」

虎吉は、期待を込めて受話器の向こうに問い掛けた。

「ん、虎吉。あんさ、ストリップティーズ、観に行かんや？」

銀獅の誘いはいつだって唐突で面白い。

虎吉は、久しぶりに声を上げて笑った。

ソルティ・ドッグとハウンド・ドッグな先輩と俺。

春宵の金色の空。

巡る私鉄の雑踏に紛れ、虎吉は、都会の駅に降り立った。

煙草を吸いたくなる。人込みは眩暈がするほど苦手だ。

ニコチン切れの苛つきと、人の多さに辟易しながら、歩みを進めた。

実世子には何の連絡もしなかった。

改札口を抜け、大通りに出る。並木道に向かって左側へ徒歩五分。銀獅と落ち合うために、地下の喫茶店“misa”に向かった。

“misa”は、古い感じの喫茶店で、いつでも薄暗く、いつでも世界から切り離されたように独特の静けさを持っている。いつでもジャズがかかっている。“misa”という屋号にも関わらず、初老のマスターが一人で経営している。

珈琲も、もちろん美味しいが、そのソルティ・ドッグがまた格別だった。

喫茶店と言っても、常連の要望とあれば、もと世界二位に輝いたバーテンが腕を奮ってくれる。絞りたてのフレッシュなグレープフルーツジュースに、普通よりも多めに入ったウォッカ、繊細なスノースタイル。どれもが絶妙なバランスで、舌を楽しませてくれる。虎吉としては、ここのソルティ・ドッグが世界一だと確信している。

もっとも、比較するほど世界を知っているわけではないのだが。

うちつばなしのコンクリートには似合わない、レッドカーペットの階段を下りて、分厚い木製扉の真鍮のノブを握る。

カウンターに立ったマスターが、視線だけで虎吉を確認すると、穏やかな笑みを浮かべた。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

虎吉は軽く会釈すると、銀獅を探した。

一番奥の、一番暗い席に彼はいた。

適度に筋肉質な上半身と、どんなパンツも着こなす長い足。初めて見た時はモデルが買物に来ているのかと思ったくらい、立ち姿の綺麗な男だ。

胸に垂らすくらいの長さの、ゆるやかなウェーブヘアと無精髭、やさぐれたキリストに見えなくもない。

虎吉が柄シャツ好きになったのは、この男の影響でもある。

モスグリーンの、古いカーテンのような花柄シャツに細身のデニム。足許はキャメルスキンの靴。胸元の銀細工の数珠チェーンと、ピンポン玉大の歪なホワイトバツファロー・ターコイズのベッドには、ティアドロップがかかっている。

ビーフジャーキーをチューイングガムのように噛みながら、テキーラを啜っていた。

「おう、おつかれ〜」

「また、今日もイカれてますね」

「お前に言われとうない」

虎吉は椅子を引き、腰掛けた。マスターが、おしほりを手渡してくれた。タツプダンスが出来るのではないかと思うくらいマスターの足音は小気味好い。相変わらず床は綺麗に磨きあげられ、古いながらもいい艶を保っている。いきなりマスターがタツプダンスを披露してくれたとしても、素直に感動できる。虎吉は思った。

「ソルティ・ドックを」

「畏まりました」

「お前、それ気に入ってるね」

「最高ですもん」

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

銀獅とのやり取りをきいた、マスターは相変わらずの穏やかな微笑をたたえ、光栄ですねと言って、再びカウンターに入っていた。

「どしたん？ イタもんオニケイはやめたんか？」

銀獅は、ジャーキーを嚙りながら、黒目だけを虎吉に向けて訊いた。

彼の凜々しい眉の下にある強い光を宿した眼は、仕事中の虎吉をよく怯えさせた。

プライベートでは、疚しいことがあると、暴かれるのを危惧させるのだ。

「ええ、まあ。好きじゃなかったんで」

虎吉は、なんとなく落ち着かなくなり、胸ポケットから煙草を取り出した。

銀獅のジツポが出される。銀の小気味好い音がして青をひそめた炎が、二人の表面を照らした。

虎吉は、少し頭をさげ、煙草を近付ける。

安物ガスライターでは、味わえない香しいオイルとメンソールの深み。

慣れてしまっていた煙草の味が、新鮮に感じられた。

「お前には、そーいっののほぅが似合っとする」

銀獅はシヨットグラスを呷った。皿の隣りにはテキーラが一瓶丸ごと置いてある。

つまみは砂糖とレモンそして、ビーフジャーキー。まだレモンには、手を付けてなかった。

「俺も、こーいっの、のほぅが好きです」

虎吉は、てるてるした化繊を指で引っ張りながら、微笑した。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

「飲んだら、いくぞ」

「ストリップ見物なんて、生まれて初めてです」

「初体験は、いつだって重要たい」

「楽しみです」

「俺も」

「銀獅さんも、未体験なんですか？」

「ん。真隆まことさんに教えてもらったのが、二週間前。痴呆ってのがこれだな」

「大して興味ないのでは？」

「いや、んなことはない」

ソルティ・ドックが、目の前に置かれる。

虎吉は、マスターに礼をいうとさっそくそれを啜った。

やはり、世界一。

そう思い、唇についた粉雪よりも細かい塩を舌で舐めとる。

銀獅は、煙草に火を点けてぼんやりと煙を目で追っていた。小さい音量の中、バリトンサクスが怒り狂っているのが、聞こえた。

虎吉は、軽く目を閉じてなめらかな果汁の苦みと、その後を包むような甘みを堪能した。

ここにあるすべてが、実世子との2LDKの世界にはないものばかり。

これからもつと、実世子との世界は遠く離れる。

奇立ちが抜けて、身体が軽くなった気がした。

寂れた町と怪しげな劇場に困る俺。

“misa”から、地上に出た時、まだ薄い金色が辺りを照らしていた。

奥行きのある瑞々しい水色のキャンバスでは、灰と金の分厚い雲が、太陽を飾っている。

刺すような金色の光線が、目を細めさせる。

くすんだ額縁のような高層ビルの群れ、行き交う人々の群れ、数珠繋ぎの車。

それらを嘲笑うかのように、頭上から目前に広がる天空の絵画は、気高く美しい。

常に胸の中に、どす黒いヘドロを停滞させている虎壱に畏れさえ抱かせた。

銀獅はティアドロップをかけて、口笛なんか吹いて前に行く。虎壱はそっと、その背後に隠れ、二人は駅へ戻った。

今いる中心街から、四つ引っ込んだ駅までの切符二人分を銀獅が買った。自分が誘ったのだから、お前はついて来るだけでいい、と銀獅は云った。虎壱は、まだ遊ぶ分の自分の金を持っていたものの、ありがたく銀獅の好意にあやかるところにした。

車窓に一切目を向けなまま辿着いた四つ目の駅は、中心街に比べて、ひどく寂れていた。

若者の姿がほとんどなく時間の流れが、非常に曖昧に感じられた。曲がった腰を庇うように杖をついて歩く老人。椅子にもなる花柄の買い物カートの上で蜜柑を食べている老婆。塗料の剥がれかけたベンチで、世間話をしている二人も、虎壱の祖母と同じくらいの年齢だろう。

先ほどよりも斜陽の色合いが濃くなっていて、春宵というよりも、

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

秋を思わせた。どこかに柿の実がなっついていてもおかしくないと思い、なんとなく線路の向こうに見える低木に視線をやった。

「のどかな場所やねえ」

銀獅が、さっそく煙草を銜えて呟いた。

ティアドロップで邪魔されているものの、口許は綻び、声色は穏やかだった。

虎吉は、寂れたまま退廃していくのを気にしていないような、この場所の空気を、薄気味悪く感じた。

諦めなど、当の昔に忘れたと言わん許りの緩やかさ。

雑踏の中の緊張感はない。まるでこの場所に馴染めない自分を感じた。

誰も銀獅と虎吉の姿を見留める者はなかった。それぞれ遠くを見ているようだった。

駅員さえも見当たらない。

銀獅は、正しく改札を通過していく。虎吉は見失ってはならない標識のように彼の背中を追った。

駅前の商店街のアーケードも当然のごとく衰退している。すでに大半のシャッターが閉められ、見当たらないのに、魚屋のような生臭い臭いが、鼻孔をかすめた。

時代に取り残された哀しみが屈折して、かろうじて息づいている。古めかしい装飾の入口の、染み付いた意地のようなものが、賑わっている繁華街よりも猥雑さを醸し出していた。

「銀獅さん。こんなところにあるストリップティーズ、やばいんじゃないですか？」

虎吉は、なんとなく肌寒さを感じて自分の腕をさすった。

「それがよ、いるんだって」

銀獅は、煙を吐き出しながら顔だけ振り向かせた。

「え？」

「」

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

「すげえ若いお嬢ちゃん」

銀獅は、疑いもせず歩いている。虎吉は首を傾げた。どうせ、デブスだ。

すでにうんざりしていた。

実世子みたいな女が、舞台に出て来たら暴動を起こしてやる。そう思って、自分の視野の狭さに余計うんざりした。

商店街は意外に広く、奥行きがあった。全部が路地裏のように湿っぽい場所にも関わらず、入り組んだ狭い道を歩いた。

銀獅は、初めてのようなことをいつていたが、その歩調に迷いはない。

「銀獅さん、場所知ってるんですね」

「大体しか聞いとらんけど、呼ばれとるような気がする」

銀獅が野生動物のように研ぎ澄まされた勘や眼光を持っているのは、虎吉も承知済みであるが、呼ばれているというのはどうなのか。そんなことを考えているうちに、銀獅が立ち止まった。

前方不注意の虎吉は、前のめりになり、その背中に鼻からぶつかった。

「……グラチオン劇場、ここやん」

銀獅は短くなった煙草を捨てた。

虎吉は、鼻を擦りながら、その建物を見上げた。ただの、古い汚い、貼りつけレンガの建物。

脚立みたいな錆びた看板には“グラチオン劇場”と記されており、両隣りには、砂埃で塗れた花輪が立て掛けてある。いかにも場末、年代物のうさん臭さが漂っていた。

「劇場……って」

虎吉は、入口のベニヤ板に木目シールで加工されただけのドアに目をやった。

銀獅は、新しい煙草に火を点けた。

中に入ると、意外に広かったが、薄暗く、照明は豆電球みたいに

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

乏しい。

入ってすぐに管理人室みたいな受付があった。

建物が年代物のせいか、なんとなくカビ臭い。

ほつれかけたカーペットは何十年も替えられたことがないように見えた。

正面には、大昔のシネマ館、あるいは縁日の見世物小屋のような劇画で描かれた裸の女の看板がかかっている。

“ 黴られ、辱められ、咲き誇るは、激情の白い華。くグラチオン劇場 ” みたいな謳い文句が綴られているのを、目を凝らしてようやく読んだ。

「いらつしゃいませ」

受付には、妙に愛想笑いの強い、白髪にアイパーをかけた黄色い歯の男が、二人を待っている。

「……本当に大丈夫なんですか？」

虎吉は、小声で銀獅に尋ねた。

一人五千円も払って、ここに入る意味があるのだろうか。

「こんななんも、面白そうやん」

虎吉の不安も気に止めず銀獅は尻ポケットから、長財布をとりだして、万札を抜き取った。

銜え煙草の、そのさまは博打打ちのように見えた。勝負の瞬間だけを楽しんでいるような笑み。当りか外れかなど、銀獅にとって、問題ではなさそうだった。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

生まれて初めてのストリップ見物。切れるよ？俺。(前書き)

ここから最低度あがっていきます。

生まれて初めてのストリップ見物。切れるよ？俺。

妖しく輝る赤いステージ。

闇に浮かぶその場所は、闇に沈んだ客席から、離れていた。

劇場内には、虎吉達以外に、十名以上の観客がいた。虎吉はまず、自分たち以外に客がいたことに驚いた。

そして、全員が加齢臭を通り越して腐敗臭のようなものを全身から放っている老人だということに更に驚いた。

「客、入ってますね」

虎吉は隣でピスタチオの殻を剥いている銀獅に耳打ちした。

「時間の有餘つた年金族やろ」

お前も食う？ とピスタチオを差し出されたが、虎吉は微笑してやんわりと断った。

さっきの受付に置いてあった売り物で、製造年月日は最近のものだったが、なんとなく食べる気になれなかった。

照明が落ちて、ステージの真上のちやちなミラーボールが回り始めた。

「ようこそ、グラチオン劇場へ！ 本日最後の第三幕！ トップを飾るは、あけみちゃん！ 熟練されたベテランの踊りをお楽しみください！」

妙にこなれたアナウンスに場内は色めきだったが、虎吉は萎えた。隣の銀獅も、つまらなさそうな表情のまま、指でピスタチオの殻を弄っている。

軽快な音楽が流れ始めたが、照明はあまり明るくない。

登場した踊り子は、予想通り、年増だった。

しかも、悪いことに、忘れかけていた実世子を思わせる、髪が多い、腹まわりの崩れた女だった。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

「あんなん出てこられてもなあ……」

銀獅は、前方席に両足を投げやり、ピスタチオの殻を噛んだ。

「やるのはいいけど、観るのは、向いてねえ」

「あんなんとヤれます？ 銀獅さん」

虎吉は、吐き気を堪えて、自嘲した。

ほとんど毎日、自分はあるなメス豚を抱いている。そう思うと、再び胃の辺りがムカついた。

「なんでや？ ああいうのは、触り心地がよかとばい」

銀獅は、ステージの女を指をさしながら虎吉を諭した。

「メス豚じゃないですか。ああいうのはしつこいですよ」

虎吉は苛立ち、煙草を取り出した。

動きは鈍いが、最前列で盛り上がる老人達。激しいリズムに、身体をくねらす年増女。自ら乳房をまさぐり、薄っぺらい衣装をはぎ取っていく。まるで邪教の宴のように奇妙で暗い踊り。

虎吉は、煙を追うことにした。

一段と明るさを増した照明に、感情もなく、ピスタチオを咀嚼する銀獅の横顔が照らされ、虎吉の視界にはいった。

「あ。あの女、イクばい」

まるで、池の魚が跳ねた、くらいの何気ない調子で銀獅は言った。

虎吉は、条件反射のようにステージに目をやった。

きつすぎるくらいの眩い照明の中、白い膚をした全裸のメス豚が、両足を思い切り開いて、のけ反っているのが見えた。がくがくと膝が痙攣しているのもわかった。

「あそこまでやるったい」

銀獅は、薄ら笑いを浮かべている。

その隣で、虎吉はえずいていた。

その姿が、恍惚を浮かべる表情が、行為の終盤でみる実世子にあまりにも似ていたのだ。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

の靴音がした。

虎吉は、自分を急かしたが、自販機の下の僅かな隙間の五百円玉が視界に入り、腰をかがめ手を伸ばした。

ハイヒールの靴音は、すでに近くになった。

虎吉は、思わずそちらの方を見てしまった。

「あら……」

階段に立っていたのは、白いノースリーブのフレアワンピースを着た髪の長い少女だった。

実世子や、さっきの年増の踊り子とは異なり、真っ直ぐ腰まで伸びた栗色の髪。

きれいな二重瞼に切れ長の瞳。涼しげな鼻筋。

純文学的な美少女、と形容される若い女優に似ていた。

「お客様がいたのか……」

少女は独白をして頷くと、虎吉に笑いかけた。

「驚かせてしまって、大変申し訳ありません」

自分に向けられた声と笑顔に、虎吉は、はっと我にかえた。

「あ……いや、さっきの、きみ？」

虎吉の問い掛けに少女は微苦笑を浮かべて、曖昧に頷いた。

「う、あ、はい。あの、私の姉さん……です」

虎吉を全体的に眺めながら、少女はゆっくり一步を踏み出した。

舞台が終わった後は、いつもああなんです。と申し訳なさそうに続

けた。虎吉も、ぎこちなく、そうなんだ、と応えたがさっきの年

増と目の前の少女がどうしても、結び付かなかった。まだ母親と言

われた方が、納得が行く。

「は、初めて、ですよ？」「こじ」

少女は歩み寄りながら、上目遣い気味に虎吉をみた。

「あ。ああ、うん」

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

五百円玉を握った掌が、じつとりとした汗をかいている。

少女は顔を上げ、にっこりと笑った。

「いま、リョウコさんが舞台をやってて、次は私なの。よかったら観ていってよ。爺さん以外の客なんて初めてだよ」

純文学的な美少女の面影が消え失せ、悪戯っぽい笑みを浮かべた踊り子が、虎吉の手を五百円玉ごと握った。

虎吉は、心地よい夢から叩き起こされたような気分になって、口許を引きつらせた。

「……ああ、そうするよ」

「楽しみにして置いてね。私は皆とちよつと違うの」

幼い踊り子は、そう言うと、小さな舌を出し、虎吉の手を解放した。

なんだか、裏切られたような気がして、目の前の少女をただ呆然と眺めた。

「私、ヒミコ。よろしくね。お兄さん」

ヒミコは虎吉の落胆に気付かないまま、二、三度肩を叩くと、自販機で炭酸飲料を買って、再び、階段の方へ行ってしまった。そして、階段を少し下り、五百円玉を握ったまま見送る虎吉に、向かって、片目を閉じて、指だけをばらばらに動かすやり方で手を振ってみせた。

ホワイトロリータと銀獅さん。俺は？

会場に戻り、耳に流れ込んで来た大音量の音楽と共に、再び胃がム力つくのを感じた。

リョウコという女は痩せ気味で、二十代後半くらいの髪の毛の短い女だった。

老人達は相変わらず、思い思いに舞台を楽しんでいて、虎吉を失笑させた。席に戻ると銀獅は、ピスタチオの殻を床にばらまいたまま船を漕いでいた。

虎吉が銀獅の肩を揺さぶると、彼はすぐに目を開いた。

「ん、ああ、虎吉、具合良くなったや？」

銀獅は、背伸びをしながら虎吉をみる。

「まあまあです。次、出ますよ」

虎吉は銀獅に耳打ちをした。銀獅は眉を潜めて虎吉をみた。

「なんが出るとや？」

銀獅はすでに、自分が言っていたマル秘情報を忘れていているらしい。

「すぐえ若いお嬢ちゃん、です」

虎吉は溜息混じりに答えた。銀獅は、無造作に腹を掻き、あ、そ、と言っただけだった。もはや、彼はグラチオン劇場に期待など抱いてないように見えた。

虎吉は口を尖らせて、反応の薄い銀獅の隣に腰を下ろした。

ようやくリョウコの舞台が終わり、照明が消え、垂れ幕が下りた。

虎吉はほとんど首で椅子にもたれかかるようにして両手を前で組んだ。銀獅は背もたれに腕をまわして、相変わらず前方席に両足を乗せている。

申し訳程度に歌謡曲が小さく流れている。懐メロがなんの違和感もなく聞ける。タイムスリップしてしまったのではないかと、錯覚するほどだった。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

「やたらと準備時間が長く感じられた。」

「なんか、よう判らんばってん。変わった場所やね」

銀獅は心底、どうでも良さそうな口振りであった。

「ええ。確かに」

虎吉は心底同意して、頷いた。

「まことに心残りではございますが、本日最後のショーでございます！ 舞台を飾ってくださいるのは、我がグラヂオン劇場のとおおきのダンシングボー！ ヒミコちゃん！ 登場です！」

アナウンスの紹介に、老人達が一層盛り上がった。今までも充分、いい食い付き方をしていたが、初めて、どよめきと拍手が起ったのを聞いた。虎吉と銀獅も徒ならぬ盛り上がり、目配せをし合った。

辺りが、溢れんばかりの金色の照明に照らされ、赤い幕が、ゆるゆるとのぼっていく。

バンジョーやアコーディオンの音色が流れて、現れたのは、メリーゴーランドのようなきらめきに満ちたステージ。

先程のシヨウとは、全く違った。

床には、白い薔薇の造花が敷き詰められ、回転する円状舞台の上には、さつき虎吉を失意に貶めた美少女が、セルロイド人形のように立っている。

あまりにも可憐で美しい少女の登場に、虎吉は、目を見開き、胸を弾ませた。銀獅も、ようやく顔を上げ、ほう、と感心したように息を吐いた。ヒミコは、音楽に合わせて、ゆるゆると動き始めた。ふんだんな白いフリルのエプロンドレスは、舞台の裾から伸びたワイヤーに引っ張られ、絡繰り小箱のように一枚一枚引き裂かれていく。

パントマイムの素振り、驚いたり、怯えたりしている内に、重ねられたフリルはどんどん薄くなって、色素の薄い白い膚が露にな

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

る。

おとぎ話の中の少女が悪い魔法によって翻弄されるようだった。虎吉の視線は、舞台の美しい少女人形にくぎづけになり、下腹部が膨張して行くのを感じた。

前列の老人達も、虎吉も少女人形を辱める黒い影となっているような錯覚をしていた。

とうとう、白を基調としたコルセットと、バレリーナのようなレースの透けたミニスカートだけになり、少女人形は力つきたように地面にへたりこんだ。

バンジョーが激しくなり響き、少女はマリオネットのように、開脚していく。

自ら、膨らみかけた乳房を持ち上げ、編み上げの前方を開いていく。

虎吉の動悸はこれ以上ないほど激しくなり、穿き慣れたジーンズでも、痛むほど下腹部は張り詰めていた。

息をするのも忘れて、少女人形を凝視する。

白い隆起した先端には、薄桃の蕾が見えた。

老人達も、虎吉も、隣の銀獅さえも、低いうなり声を上げた。

広げられたレースのミニスカートの奥に、漆黒の茂みはなかったのだ。
なめらかな素膚と、淡く赤みを帯びた亀裂が曝されていた。

虎吉は、思わず、前屈みになってしまった。

触ってもいないのに吐精したのは、初めての経験だった。

「おい、虎吉……？」

異変に気付いた銀獅が、虎吉の肩に触れた。

一気に羞恥が爆発し、虎吉は銀獅の手を振りほどき、長い足をハードルのように飛び越え、会場から飛び出した。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

「虎吉……、まさか、な……」

銀獅は、振り払われた淡い痺れの残った自分の手を見ながら、苦笑した。

虎吉が飛び出したドアが閉まるのと同時に、照明も消えた。幕が閉じられ、ほの暗い蛍光灯と共に、さびれた劇場が露になった。

客を追い出すようなアナウンスが流れている。

舞台を堪能した助平爺さん達が、生気を失ったように背中を丸め、ちらほらと解散していった。

「ヒミコちゃんは、観音様みたいじゃのう」

「いいや、メリケン人形さんだ」

「あの××××に一度触つてみたいものじゃ」

老人会の集会が終わった帰りみたいに、固まった老人達が、他愛もないやりとりをしていた。

銀獅は、それを横目で見ながら溜息を吐いた。

あんな観音様が、いてたまるか。

胸の内で悪態を吐きながら、銀獅は宙を仰いだ。

劇場には、人がいなくなり、再び歌謡曲が流れ始める。

やっぱり、裸の女は眺めるより触るもんだ、と思いながら、腕時計に視線を落とした。

午後十九時半を指している。このまま虎吉を晩メシまで引っ張るか。

銀獅は、大きな欠伸をして背伸びをした。

「あらあら。お兄さん。なにしてるの？」

舞台の裾から薄っぺらい衣装を纏ったさっきの少女人形が現れた。

「ツレば待つとる。出た方がよかと？」

銀獅は欠伸を噛み殺しながら、少女人形に訊いた。

「ツレって、あの緑っぽい頭の若い子？」

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

「お嬢ちゃんに若いって言われるのもなあ」

銀獅の答えに、少女はムツとしたように口を尖らせた。

「ヒミコよ。お兄さん」

「俺は銀獅」

「ぎんじ、さん。お連れの方は？」

「虎吉。多分、便所かな。出ていった方がよかね？」

「そうね。清掃はいるから」

ここを掃除するのか、と銀獅は辺りを見回した。ヒミコにもその意図が見えたらしく、小さく笑った。

「ねえ、銀獅さん、もう帰っちゃうの？」

ヒミコの含んだような口振りに気付いた、銀獅は右眉を上げた。

「なぐんば企んどつとか？」

ヒミコは、銀獅の側に歩み寄り、膝をついた。

「私と遊んでくれないかしら？」

媚びるような上目遣いを見せて、ヒミコは笑みを強めた。

「なんして遊ぶとね？ お人形さん」

銀獅は、腕置きに頬杖をついて、ヒミコをみた。

「人形は愛玩されるのを望んでいるの。それとお金もね」

生意気な答えを、銀獅は鼻で笑い飛ばした。

「虎吉が承諾したらよかばってん、お前ここから出てよよかとね？」

「

「出たことがないの。連れ出してくれる？」

「虎吉の返答次第やね」

銀獅のつれない答えに、ヒミコは頬を膨らませた。

「あの子の方が格が上なの？」

ヒミコは、銀獅の膝に甘えるように覆い被さった。

「上も下もない。俺たちは今、二人で行動しよるわけやから」

銀獅は、戯れつくヒミコに構うことなく煙草に火を点けた。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

翔るメス豚、キレた俺。(前書き)

【ご注意】 卑猥な表現MAXです！

蹴るメス豚、キレた俺。

劇場の便所は、どこの公衆便所よりも汚かった。

アンモニア臭だけではない、何かの腐敗臭や虎吉のボクサーパンツを汚した白濁と同じ臭いも混じっていて、呼吸をするのも不快だった。

虎吉は、個室で舌打ちをしながら、ベルトを外していた。

生まれて初めて見たストリップで、自分を落胆させた女のあらゆる姿を観て、みっともなく欲情し、そのうえ呆気なく射精してしまったことが、屈辱だった。

立て付けの悪いドアが軋みながら開く音を聞き、虎吉は、ジーンズを下ろす手を止めた。

「……銀、獅、さん？」

まさかと思いなから、声を掛けたが、返答はない。

不審に思った虎吉は、ジーンズを上げてホックだけを留めると、そつと個室のドアを開き、僅かな隙間から、外を伺った。

髪を振り乱した女が立っているのを見て、身体が硬直した。

「うわあああつ！」

虎吉は、驚きの余り、バランスを崩して、便座に尻をついた。

ぺたぺたと足音が近付いて来る。身体が制御不能になりガタガタと震える。

かなり前に流行ったホラー映画の女の霊に出会ってしまったような気がした。

頭上に影が落ちて、虎吉はきつく目を閉じた。

「……ねえ、……いて」

か細い息にそぐわない荒い息、女の霊ではないのがわかった。

虎吉は、恐る恐る顔をあげ、影の本体に視線を向けた。

目の前にいたのは、一番始めに踊った年増の踊り子だった。肩紐

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

のずり落ちたスリッパ一枚の姿で、黒っぽい乳首が透けている。
虚ろな眼差しで虎吉を見つめていた。ぞっとしたのも束の間で、
虎吉の脳裏に、実世子の顔が過ぎり、恐怖や怯えが、一気に怒りに
代わった。

「なんなんだよ！ アンタ！」
虎吉の怒声に、女は怯むことなく、立ち尽くしている。

「……お願い……。抱いて。……が疼くの……。お願い……。欲しいの。
あなたの為に脱ぐわ……。すべてみせるから……」
か細い声で、繰り返す。虎吉は、立ち上がると、怒りに任せて女
の腕を引っ張り、個室に引きずり込んだ。

女は悲鳴一つ上げず、タンクに手をついた。
「なんなんだよ！ そんなに、
が欲しいのか？！ メス豚の
くせに！」

虎吉は、AVのように卑猥な台詞を吐きながら、女のスリッパの
裾をたくしあげた。

ヒミコが見せたのとは異質の、黒ずんだ茂みが見えた。

虎吉は、ホックを外し、ジーンズを下げた。

格好のつかない髪を鷲掴みにし、上を向かせた。

「お前はただの家畜だろ！ いくら無様でも、アイツとは似ても似
つかねえ！」

そう叫びながら、ちらつく実世子の顔を必死に消そうとした。

「なんとか言え！淫乱！」

虎吉は、後ろから腰を打ち付けながら、女を罵った。

欲情ではない、怒りで屹立した肉の塊を、乱雑に打ちつけた。
女は恍惚を浮かべて、鼻にかかった声を上げるだけだった。

髪を引っ張り、がむしゃらに腰を打ち付けていると、ろくな快感
もないまま、少量の精液を放出した。

虎吉は、女を突き飛ばすように自身から離すと、個室から飛び出

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

した。半端に下ろしたジーンズに足を取られながら、洗面台に両手をついた。

蛇口をいっぱいに開き、えずくまま、唾液やら込み上げてくる胃液やらを吐き出した。

「ね、ねえ……、もつと……」

すがりついてくる女の指が、腕に絡まる。

「うっせえんだよ!! 離せ!! 淫乱メス豚!!」

女の手を振りほどき、腹の辺りを思いきり蹴り飛ばした。

女は後ろに吹っ飛び、個室の壁に腰を強打した。低い呻き声を上げ、乱れた黒髪の間隙から、鈍い光を宿した眼で虎吉を睨み上げた。

「くッ!!……この……このひとでなし!!!!!!」

女は甲高いかなざり声で叫んだ。

「うるせえってんだろ!! キチガイが!!」

虎吉は、何度か女を蹴り上げ、黙らせると、水道で口を濯いだ。

酸味のある鉄臭い水は不味かった。

冷たすぎる不味い水で顔を洗い、曇って、ひび割れた鏡を除きこんだ。

青褪めた男の背後から、干涸びた唇から一筋の赤い血を流した女が、短い息を繰り返しながら、睨んでいるのが見えた。

「物欲しそうなツラしやがって、くたばれ。メス豚」

虎吉はそう吐き捨てて、便所を後にした。

受付の前の壁に、背中をもたせ掛けた銀獅が、虎吉の気配を感じてか視線を向けた。

「銀獅さん……」

虎吉はようやく、自分以外の人間を見たような気がして、強張った

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

表情を緩めた。

銀獅は、煙草を指に挟むと、無言のまま虎吉に歩み寄った。そして、虎吉の胸倉を掴むと、感情を押し殺したように無表情な顔を近付け、煙と共に低い声を漏らした。

「……虎吉……、因果応報って言葉、知つとるや？」

銀獅の眼に渦巻いた怒りを見て、虎吉は背筋に冷たいものを感じた。口は開いたものの、言葉が出なかった。

「……きさん、さつき便所でなんしよったとや？」

銀獅は、虎吉を突き飛ばすと、足早に便所に向かつていった。

その後ろ姿を見送りながら、虎吉は尻餅をついたまま、震え始めた。

「因果応報なら、姉さんだって、仕方ないよ」

銀獅が立っていた場所のすぐ隣にくぼんだところがあつて、そこから、ヒミコが顔を出した。

「あの人、男狂いだから。いかれちゃってるのよね。いつものことなのに、ゼーんぜんっ懲りないの」

ステップを踏むような足取りのヒミコに目をやりながら虎吉は、唇を震わせた。

「……なんだよ……あの女……」

「私のおねえちゃん」

ヒミコはどこか歌うような口調で答えた。

「気にしないでいいわよ。あのひと、暴力に慣れてるから。すごく頑丈なの。銀獅さんに言つてこなくちゃ」

虎吉は、後ろ手をついたまま息を吐いた。

“因果応報”

その言葉と、射抜くような銀獅の眼差しが、頭から離れなかった。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

翔るメス豚、キレた俺。(後書き)

こんなことする男子は最低ですが、こんな女子もだめですよ。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

虎吉は、一人で劇場の外に出た。

すっかり日も暮れたが、生暖かい風のお陰で、寒さは感じなかったが身体の震えが止まらなかった。

「いいって、気にしないで」

ヒミコに追い出されるように、銀獅がベニヤのドアから出て来た。押し問答が続いた拳句、銀獅はヒミコにねだられ、携帯番号を教えるはめになっていた。

虎吉は、低いコンクリートの塀に腰を下ろし、頭を抱えた。

尻ポケットに入れていた携帯番号が、思い出したように震えた。ディスプレイを確認すると、“実世子”と表示され、眺めているうちに切れた。

携帯電話を開いて見ると不在着信が二十件と、新着メール八件の表示があった。

そして、再び、振動した。

虎吉は、カッとなって衝動のままにそれをアスファルトに叩きつけた。精密機械と言われるそれは、無残にひしゃげて一瞬発光すると、諦めたように沈黙した。

虎吉は再び頭を抱えて俯いた。

「今日は厄日になってしまったな」

いつの間にか目の前に影が出来て、銀獅の声が落ちてきた。

虎吉は、顔を上げて無然とした表情で、銀獅をみた。

「どっちもどっちだったって、あん娘が言いよった」

銀獅は、相変わらず煙草をふかしていた。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

「……銀獅さん……」

虎吉は、なにかが切れたように涙腺から込み上げてくるものを感じた。

「……俺……」

虎吉の脳裏に、実世子や年増女の顔が一気に過ぎった。

銀獅が大きな息を吐くのがわかった。

気配が近付き、大きな掌が、肩に置かれ、虎吉の涙腺はついに堰を切った。

「……俺のせいかも知れんな。俺がこげなとこ連れて来たけん……」

銀獅の言葉を遮るように虎吉は首を横に振った。

「……違うんです。……俺……、実世子が……」

虎吉は、言葉の組み立てかたを忘れたように呟いた。

実世子が“愛している”と繰り返す度に、心が離れていく事や、束縛されるほど、息苦しくなること、彼女の好意が恐ろしくなることや、便所での出来事を喋り倒した。

言葉を連ねた後、胸の中が空っぽになったような気がした。

そして、漠然とした不安だけが残った。

「……銀獅さん……、人を愛するって……どんなことなんですか？

愛ってなんなんですか？ 愛や善意は、押しつけるものなんですか？」

虎吉は泣きじゃくりながら、銀獅のモスグリーンのシャツの胸元にすがりついた。

銀獅は、虎吉の肩を強くて掴み、片手で頬を叩いた。

「いいか？ 虎吉、無償の愛に辿着ける人間なんか、今の世の中にほとんどおらん。この世に、他人を愛することのできる人間は、ほとんどおらん」

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

銀獅の言葉に、虎吉は脱力した。
銀獅は、崩れ落ちそうな虎吉の胸倉を掴み、引っ張りあげた。

「虎吉、器のでかい男になれ。押しつけられる愛情に潰されるようじゃいかん。甘えるな。中途半端に受け止めるな。半端に流すくらいなら、最初から取り入れるようなことすんな」

銀獅の、強い眼差しが、涙で滲んだ。

ただ、流されて来た今までの自分を思った。

なんの意志もなく、用意された場所にいた自分に苛立った。

虎吉は、生まれて初めて、涙が止まらないかもしれないと、思った。

しかし、涙と共に、胸の中に滞留していたヘドロがでていくような気がした。

頭痛がするほど泣く機会は、二度とないだろう。そう思いながら、銀獅にすがりついたまま泣き続けたのだった。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。(後書き)

おもいつくまま書きなぐりました。最後までお付き合い下さりありがとうございました。きっかけとなった曲は、ドーベルマンで“ストリッパー”でした。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6836b/>

嫩られ、激情の果てに咲くのは、剥き出しの俺。

2009年6月27日21時49分発行